参考

・「春日井建氏の歌」三島由紀夫（「現代詩手帖特集版　春日井建の世界〈未青年〉の領分」齋藤愼爾・水原紫苑責任編集　思潮社　平十六／初出：雑誌「聲」　昭三十四・四）

或る友人が数ケ月前、私に春日井建といふ十九歳の少年歌人の作品を示した。その何首かは甚だ心に触れたので、その月の「新潮」の日記でも、氏の歌に言及した。今まで徒らに見すごしてゐた短歌雑誌を、今月は春日井氏の新作が出てゐないかと頁を繰つてみるやうにもなつた。

春日井氏の短歌は、いふまでもなく未完成な芸術である。しかし現代の只中に生きてゐる少年の、いつにかはらぬ心細さ、うひうひしさ、残酷さ、孤独、などが、純一無垢にあらはれてゐる点では、近ごろの学生作家の小説などよりは、はるかに心を搏つものがある。かの石原慎太郎氏の作品にしても、私はかなり巧者な技巧を持つたその小説よりも、粗雑で未完成ながら、一生懸命な魂が裸のまますりむけてゐるやうな、その詩作のはうを愛する。春日井氏の短歌も、要するに、うら若い裸の魂が、すりむけて血を流してゐるだけのことだ。しかし氏の短歌のあるものは、この短詩形の伝統の形骸などはとつくに逸脱して、ロッカビリーの狂躁の隣りへもつて来ても、少しもをかしくないのである。

「火祭りの輪を抜けきたる青年は霊を吐きしか死顔をもてり」

これは氏の近作のうちで最も美しいものだ。ここには抒情をとほり越した何かがあつて、青春といふものの挫折の主題が、蒼ざめた青年の顔の彫塑のやうに、くつきりと呈示されてゐる。青春を主題にするには、十九歳の少年といへども、身を一旦、青春の向う側、火祭りの輪の向う側に置かなければならないのである。

こんな現代に、古い定型詩が、擬古趣味や、哲学趣味や、ねちねちした女性的情感のアラベスク趣味などの、恰好の隠れ場所、適当な盛り皿になることは十分考へられるが、それがかうした現代の一少年のいらいらした反抗的な詩精神の器にもなりうることを発見すると、改めて定型詩といふものがバカにならないことを感じさせられる。しかも小説のやうな自由なジャンルとはちがつて、春日井氏の場合でよくわかることは、この短歌形式なるものが、小説を以てしては独り合点な個人的な告白にをはるところに、形式の最大の利点がある、「生れながらの普遍性」を与へてゐることである。かかる形式の所与の普遍性は、本来、普遍的情念の器として発達したもので、古今和歌集はその完璧な達成であるが、現代では、形式所与の普遍性は、もつとも普遍性を欠いた情念の器になるべきであり、十九歳のいらいらした、熱狂的な、焦躁にあふれた少年が、この形式を採択したのは、賢明といふより宿命的なのだ。といふのは、この短歌形式が春日井氏の天稟のものだといふ考へ方は、世間普通の考へ方にすぎず、実は春日井氏といふ特定の名を借りなくても、現代にあつて或る十九歳の少年が、古い三十一文字に託して詩作をするといふことは、この少年がしんそこから、自分の傷ついた魂の独自性と孤独を発見して、それが絶望的に人に理解されぬ性質のものであり、伝達不可能なものであると感じたことの必然的帰結でなければならぬからだ。

定型詩はなほかかる機能を以て現代に生きてゐる。それはかういふ少年の「表現の絶望」と結びつくことをも証明したわけで、

ここに形式といふものの現代に生きてゐる意味があり、形式はおのづから普遍性を与へるけれど、それは結果としての問題で、形式を採択する側からいへば、そんな結果は問題ではなく、彼はただ、「絶望の容器」を探してゐるだけなのだ。

・「現代日本の詩歌」吉本隆明　毎日新聞社　平十五

俵万智さんの第一歌集『サラダ記念日』（河出書房新社）は、歌集としては珍しいベストセラーになった。俵さんの歌が同時代に多くの人々の心をとらえたのは、平明でやさしい言葉で、誰にでもあるような情緒や感情の瞬間をうたっていたからでもあるが、もっと隠れたところにある理由は、この歌人が自分を特別の人間とは思っていない点だと思う。

いわゆる詩人と呼ばれる人々はみな、どこかで自分を特別な人間と思っているところがある。他には能力がないから仕方なく詩人をやっているという場合も含まれるだろうが、そういう何らかの自己規定をしているものだ。ところが、俵さんの歌は自分を何でもない場所に置いている。

「嫁さんになれよ」だなんてカンチューハイ二本で言ってしまっていいの

（『サラダ記念日』より）

有名なこの歌にしても、普通の女の子と普通の男の子の恋愛の一場面が、とても自然に描かれている。かといって、自分を故意におとしめているのでもない。これは画期的なことだったと思う。

俵さんの登場に近い例を挙げるとすれば、明治の石川啄木ぐらいしか思いつかない。啄木の短歌も、それまでの日本の和歌では考えられない平易な言葉で、日常の何でもない出来事を歌った。しかし、啄木は、むしろ自分が天才的な詩人だと思っていた。

ところが、俵万智さんには、作品から推測する限りはそういう意識はうかがわれない。それも故意に「普通の人」を装って歌っているというのではなく、ごく自然にそうしていると感じられるのが新しいし、この歌人が人気を集めたゆえんだと思う。

何かの専門家というのはみな自意識が強いものだ。そして、その自意識を隠したいと思って隠せない人と、隠さずに自己顕示するタイプの人とがいるものだ。だから、俵さんのような人が出てきたのは、おそらく詩人や歌人では初めてといっていい。

ひょっとしたら、俵さんも心の中では、啄木よりも自分のほうが天才だと思っているのかもしれないが、そのような自意識は一切、言葉の上に現れていない。こういうことは簡単にはできないことで、この歌人の才能であり、天才的なところだと思える。私にとっては、そんなふうに、その人がその職業や専門家「らしくない」、何でもないような顔をしていられるというのは、人間として人格的な理想でもある。